
太陽がくれたもの

NagiSa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽がくれたもの

【Zコード】

Z5934M

【作者名】

Nagisa

【あらすじ】

よく冷えた冬のある日。

耳にあてた受話器から聞こえてきたのは一年前に別れた彼女の声。

「会って話がしたい」

僕はいつだって、彼女のことが好きだった。

昨夜は雪が降った。春を待つ木々に雪がかかつて、枝が垂れてい
るものもある。

今日は雪は降っていない。しかし空は相変わらず雲に覆われて、
太陽の光は届かなくなってしまった。

店の外に見える景色を眺めながら僕は暖かい紅茶を一口飲んだ。
まだ寒さが残る街を歩いて冷えた体に、優しげな温もりが広がる。
店の扉が開き、掛けてあつた鈴が心地よい音色を奏でる。その音
に反応して目線を向けると、実奈がいた。

久方振りに見た彼女は、やはり美しかった。防寒着が健全な小麦
色の肌を隠してしまっているのが残念だ。

ただ、以前より若干肌の色が薄れているような気がした。

不安げに店の中を見回している彼女に手を振ると、わずかに頬を
赤らめさせてこちらに向かってきた。

「やあ、久しぶり」

こちらから声をかけてやる。懐かしい太陽のような笑顔が僕に向
けられた。

僕はもう一口紅茶を飲んだ。

「ごめん、待たせちゃったかな」

「大丈夫。先にいただいてるよ」

僕は飲んでいた紅茶のカップを持ち上げて見せた。実奈は向かい
の席に座り、手を擦り合わせて体を温めている。

「君から僕を呼ぶなんて、どういう風の吹き回しかな」

かつての彼女に、付き合つてた頃そうしたように肩をすくめてお
どけながら質問した。

「ごめんね。迷惑だつた？」

「とんでもない。嬉しいさ」

でも不思議である。一年前別れを告げたのは彼女からだ。それが

「昨日、突然の電話。会つて話がしたいといつ」と待ち合わせの店だけを告げ終わった電話。

もしかして彼女はまた付き合おうといつとを言いに来たのだろうか。僕は今でも彼女のことが好きだ。だから、それは願つてもなうことだ。

「ところで、陸上はまだ続けるの？」

突然、昔を思い起させるよつた質問をしてきた。

実奈と出会つたのは中学生の時。その時僕は陸上競技部に、実奈はテニス部に在籍していた。僕は高校に入つても陸上を続けた。そして実奈と別れて大学に入つてからも。

「ああ。続けているよ。今度大きい大会があるんだ。十種競技に出ることになつてる」

「へえ。相変わらず運動神経いいんだ。私は……テニスやめちゃつた」

実奈は笑いながらそつと言つたが、どこか寂しそうだつた。あれだけ好きだつたテニスをやめたのだから、当然か。

「そつか。だから日焼けしなくなつたのかい？」

「うん、前より薄くなつたでしょ。どつちの方がいい？ 前の私と今の私」

そんなこと言われたつて選びようがない。どんなに姿が変わつたが、実奈は実奈だ。

「いいや、今だつて変わらず可愛いよ。もしかして実奈、僕は君の小麦色の肌だけが好きだつたと思つてた？」

「ふふ、ありがとう。そんなことない。私のことをあそこまで好いてくれたのはあなたが初めてよ」

そう言われて僕は照れを隠すように紅茶を一口飲んだ。

「ねえねえ、あなたつて昔から紅茶が好きだったわよね」

「そうだっけ？」

記憶をたどつて思い出さうとしていると、実奈がふくれつ面をした。

「そうだよ。初めてのデートの時だつて、そうやつてこのカフェの
その場所で澄ました顔して紅茶飲んでたじゃない」

そう言われて、昔の記憶がよみがえってきた。まだ中学生だった
あの日、実奈が凍つた路面で滑つて服が濡れたからつて、僕の家に
泊つて行つたのを覚えてる。

「なんだか学校でのあなたとのギャップがやけに面白くつて、中学
生のくせに思つて笑つちゃつたのよ」

「そりいえば笑われたなあ。今はどうだい？ 似合つてこるか？」

そう聞けば実奈は優しげな笑みで頷いた。実奈が笑えば、僕は元
気になる。それは別れるまでずっと変わらなかつた。

「似合つてる似合つてる。うん、これはもう私がいなくとも大丈夫
ね。合格！」

「何の検定だよ。そりやあ、あの日から今日までずっと一人でやつ
てきたんだから」

別れた直後は大切なものを失つた喪失感が心を満たしていたが、
それからも暫くして立ち直つた。それ以降陸上を一心不乱にがんば
つてきた。

「あれから誰とも付き合つてなかつたんだ。……うれしい」
「えつ……？」

僕が他の女の許へ行かなかつたことを実奈は素直に喜んだ。それ
を聞いて、僕もなんだか嬉しい気分になつた。

「ううん、何でもないよ」

実奈は、誤魔化すように僕のカップを手にとつて紅茶を一口飲ん
だ。

「ああっ、それ僕の……」

「いいじょんいいじょん、今日くらいい。私も飲む？」

「いや、いいよ」

実奈の申し出を断ると、実奈は冗談だよと言いながら手をひつこ
めた。

他愛のない会話を繰り返す中で何人かの客が出入りした。扉の開

閉によつて侵入してくる寒氣に冷えたのか、カップを持つ実奈の手が震えていた。

「寒くないか」

「いいえ、大丈夫よ」

実奈も大人びてきたなと感じた。昔の無邪気さをどこかに残しつつも、落ち着いた物静かさを得たようだ。ただ、そんな実奈からは以前の活発にテニスをする姿は想像できなかつた。

彼女の声も、以前の九里先まで飛びそうな威勢のいい声から、握れば碎けそうな脆く柔らかな音色へと変わつていた。

テニスをやめたことで大人への切符を得、代わりにそれまで大切だつたことを捨ててしまつたのか。

そういえば別れる直前、実奈が頻繁に病院に通う時期があつた。もしかするとそれがテニスをやめた原因ではないかと思い、聞いてみることにした。

「……何でテニスやめちゃつたの？　あの頃病院に通つてたけどそれが原因かな？」

「あー……そう、私が病院に通つてたのはね、えっと、あれ、足怪我したからだつたの。その、だからそれが悪くなつて、テニスやめちゃつたの。そう、足の怪我よ」

その言葉にはその場で考えて口に出したよつた歯切れの悪さと、後ろめたさが混じつっていた気がした。

何か僕に隠していることでもあるのだろうか。そういうばさつきから、今日だけはとか私がいなくてもとか言つていたが……。

実奈の顔を見た。そして僕はすべて悟つた。彼女の目尻によく澄んだ涙が溜まつていたから。

「別に、いいのよ。もうテニスしなくたつて、大丈夫だから。そう、私は大丈夫。あなたこそ、怪我して陸上やめたりしないでよ」

「ああ」

それ以上は、聞きたくなかった。

「そろそろ、私のラケットをあなたにあげようと思つて、今日持つ

てきたの。受け取らないとは言わせないわよ

「……いいのか？ なら貰つておくよ」

「私だと思って、大切にしなさいよ」

机の下から懐かしいテニスラケットが取り出され、僕に手渡された。僕はそれを、壊れないようにそつと抱きしめた。

実奈が席を立ち、別れを告げる。

「じゃあ、私はそろそろ帰るから。今日は、楽しかった。ごめんね、私のわがままを呼び出して。あと、ありがとう」「う

「僕も、実奈と話せて本当に嬉しかった。こちらこそありがとうございました。僕も席を立ち、一人でレジに向かって歩く。昔、そうしたように。会計は僕が済ませて店を出た。いつの間にかまた雪が降り出していた。

無言のまま雪の街を散歩する。雲は先ほどより黒く厚くなつており、太陽は完全に覆い隠されていた。

実奈と僕の帰路が別れる道で、実奈が立ち止まつた。別れを惜しむように、どちらも押し黙つていの時間が流れた。

その沈黙を破るように、僕はいつかしたように告白の言葉を口にした。

「実奈、僕達また付き合わ……」

「言わないで」

しかしそれは美奈が発したか細い言葉によつて止められた。

「お願い、それ以上は言わないで……」

声が、震えている。視認せずとも実奈が泣いているのが分かった。唐突に実奈が僕を抱きしめた。何も言わずただ抱きつく実奈に、僕は声をかけることができなかつた。

* * * * *

雪が溶け、新たな草花の香りが漂い始めた頃、実奈は死んだ。僕と別れる少し前に、病気の種が見つかっていたらしい。

医者にもう助からないと聞いて、あの日彼女は体力を振り絞つて僕に会いに来たのだ。

彼女と最後にあつた日の直後の大会は、連日の悪天候が嘘だつたかのように晴れて太陽もその笑顔を存分に見せてくれた。その大会で僕は一位を取ることができた。不思議と体に力が湧いてきたのだ。

あのテニスラケットは、今も変わらず輝いている。

(後書き)

初めまして。本作品よつこひらを利田させていただきまや。

ニホンと申します。

今までの恋愛経験を活かして書いてみました。

が、結局その経験は反映されませんでした。

グスン。

最後までお読みいただきありがとうございました。

これからもどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5934m/>

太陽がくれたもの

2010年10月8日11時52分発行